

五峰のルート開拓

登攀倶楽部・岐阜



五峰東壁中央ルンゼの岩肌

〔はじめに〕

昨年の春、滝谷を下部から登り、明神まで縦走して主峯東稜を下降した。この時、私はまだトレスしてない明神五峰東壁を観察することができた。その結果、この岩壁は標高差五〇〇メートル以上のスケールをもち、大きさのみならず、その終了点が頂上に達しているため、岩登りの楽しさに加え、登頂の充実感が味わえると思

ったのである。

穂高に目を奪われてこの壁を見落としていたことが残念に思われ、早速、自分なりに登攀計画を立て、カールポードンの上に特異な姿を見せるメガネハングに目をつけた。東壁のルートがすべて左半分には片寄っているのはこのハングのためである。したがってルートは中央ルンゼからメガネハング帯を抜けて稜線に達する、ダイレクトルートが開拓できると考えた。

《東壁メガネハング・ダイレクトルート》

〔試登および偵察〕

◇一九六九年八月十七日～十八日

わが倶楽部の精鋭、水野、黒川とともにメガネハングにルートを拓くため、中央ルンゼからのアタックを行うも、一P登ってメガネハング帯に突き当たったところで追い返される。赤茶けたポロポロの壁はハーケンやボルトが効かず、ついに二日目に諦めて中央ルンゼに転進して頂上に立つ。

十一月三日

八月の失敗にこりずに、大ハング突破が偵察の目的で執念深く入山する。その結果、幅五〇メートルもある大ハング帯のほぼ中央部に固い岩の部分があることを確認した。夏の試登はこの左側に当たるが、

単にハング帯の形状面の弱点部をねらったために脆い部分にぶつかって追い返される結果となってしまった。

〔完登〕

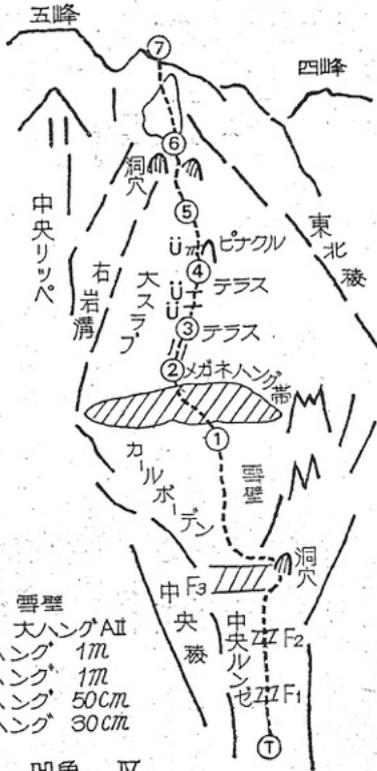
◇一九七〇年五月一日（晴）

春の鹿島槍合宿から外してもらい、一人で明神に入山する。

中央ルンゼは雪がつまり、傾斜の強い雪壁となっていて、鉄類や一週間分の食糧が入ったザックが登高を苦しくする。

その上、絶え間なく落ちてくる落石と雪塊が緊張感をおおる。一步一步、足でステップをきざんでF3に達する。右手の洞穴ルートは上部からの落石の通路となっていたが意を決して突っ込む。二、三回ザックにブロックの直撃を受けたが一

五峰東壁メガネハンゲダイレクトルート



- ①-① 350m 雪壁
- ①-② 20m 大ハンゲAII
- ②-③ 1m 第一ハンゲ
- ③-④ 1m 第二ハンゲ
- ④-⑤ 50cm 第三ハンゲ
- ⑤-⑥ 30cm 第四ハンゲ

- ②-③ 15m 凹角
- ③-④ 20m 凹角
- ④-⑤ 35m フェイス
- ⑤-⑥ 35m フェイス
- ⑥-⑦ 40m 雪壁

使用 ボルト 14本
ハーケン 27本

テラスの上は小ハンゲとなっていたが、ここでうかつにもハンマーを落としてしまった。カールボデンの雪壁に突きささったハンマーを確認してから登攀を中止して下降。ハンゲ帯はアブミを交互に替えて三本のセルフビレイを交互に取りながら下る。途中、岩で手を傷だらけにしながらやっとハン

作図 望月

このハンゲ帯から上はメガネの大ハンゲ帯を底辺とした三角形のスラブで形成されており、その真ん中に抜けだが、うまい具合に凹角が右上している。ハーケンで右に渡り、フリークライミングに移って凹角を直上、約一五メートルでテラスに達した。

気に洞穴に達した。
この中央ルンゼは単なるアブローチとされているが、何回か登高するたびに予想に反して苦しめられた。今回はとくにその感を強くさせられたが、その半面、上部ルートの価値をそれだけ高くしていることも確かである。
トラバースバンドからカールボデンに達したものの、傾斜の強い雪壁がさらにメガネハンゲ下まで伸びており、夏のハンゲ下までの一ピッチは消えている。雪壁は上層がくさっており、スリップは絶対に許されない緊張した登高が続く。苦心してハンゲ帯の下に入ると、ここは雪とハンゲの庇で巨大な洞穴が形成されていた。

行動を終えて右の目玉に当たる部分にツェルトを張る。
二日(晴) さっそくメガネの大ハンゲ帯の突破にかかる。最初は左へトラバースし中央部に出、ハーケンを二本打ってしっかりしたポイントを作ってザイルの端を固定する。ポロポロの被り気味の壁をハーケン二本でアブミトラバースして第一の庇に達する。
ここからは岩は固くなり、一筋の出っ張りをハーケンとボルトで越えようとスラブに着く。三層上にはさらに第二の庇が待ち構えている。スラブをボルト、ハーケン、ボルトと交互に連打すると庇に達する。さらにボルトを三本打ち加えて乗り越すとすぐに五〇分の第三の庇が現れ

る。一層上には第四の庇が現れるが、相変わらずボルトで一段、一段と高度を稼ぐ。さらにスラブを三層登ると最後の庇に突き当たる。そろそろ固い岩質も終わり、ボルト用の穴をあけると欠け落ちてしまう。ハンゲの根元にアイスハーケンを逆打ちして左側の赤茶けた岩にリスを求め、このあたりからはボルトが使えず苦しくなる。
ハーケンを三本連打して左側に抜けて小さなスタンスに立ったが不安定で、さらに一段登ってハーケンを打ってビレイこれで完全に大ハンゲ帯を突破できた。ザイルは二〇分くらい伸びている。予想以上に大きいハンゲ帯だ。



KADOTA IS BEST
好評発売中

カドタ・ネパール・ピッケル
KADOTA NEPAL PICKEL



KADOTA NEPAL (FÜHRER) フューラー ¥25,000

製作者 名匠 門田 茂 (作)
発売元 門田製作所関西連絡所 (米沢薬造)
〒530 大阪市北区茶屋町 5-1 TEL.06(371)8404
★弊所は小売はいたしておりません。
★全国有名、登山専門店にてお求め下さい。

KADOTA. NEPAL PICKEL
●フランケ (FLANKE) ¥22,000
●ツルム (TURM) ¥20,500

KADOTA. PICKEL
●サミット (S.S.P) ¥19,500
●サクセス (S.P) ¥18,500
●ヌプリ・マークI (NP.I) ¥17,500

★ピッケル製作開始50年を記念して門田 茂氏自ら打出したものです。製作者 門田 茂 (作) の刻印で、製造番号入りです。伝統のもとに鍛えあげた素晴らしい逸品です。

グ下に着き、さらに懸垂下降で雪壁を下って壁に突きささっているハンマーを回収した。

このハング帯だけでハーケン二〇本、ポルト一三本を使用した。

三日(曇)今朝は曇っているが、日中は晴れるだろうと見込んで出発。最初から重いザックを背にしたハングの乗っ越しとなりかなり苦しい。下からの吊り上げの補助もなく、おまけにザックに引張られながらの登攀は腕力の消耗が激しい。一段ずつ登ってビレイをとり、今度は下のビレイをはずすために下っては登り返す。単独登攀の孤独な戦いだと思わらる。

ハングを抜けて凹角を登りきるとテラスに着いた。ザックを下ろしてザイルに結んでおき、鉄類を体中いっぱいつけて上部の開拓に向かう。昨日打ったハング下のハーケンには引張ると簡単に抜けるが、小ハングなのでフリーで強引に攀じ登る。じわじわと五層ばかり直上すると小テラスが現れる。その上部も同じようなハングとなっており、慎重にポルトを一本打って越えようと、浅い凹角となつて一〇層あまりで三つ目のテラスに出る。ザイルを固定し下のテラスに下つてザックを回収し、再びテラスに登り直す。テラスからは被り気味の脆い壁にぶつかると、フリークライミングの恐ろしさを味わいながら泥だらけになって登る。さらに凹角を登ると傾斜がいくぶん弱くなつ

て稜線が見えてきた。思わずはっとする。

四〇層ザイルを一杯まで登ってビレイを取り、再びザック回収のために下つては登り直す。この登下降が苦痛の種である。テラスに戻り再び疲れた体にムチ打って上部の壁に向かう。ここからはホルドの多い快適な岩登りとなり、三〇層で草付に出る。さらにブッシュを抜けると右岩溝の洞穴上に出た。ここからは雪壁が稜線まで続いているのがよく判る。

一段落したところで洞穴で食事をとり、登攀具をしまつて最後の雪壁に向かう。傾斜がきつくと、疲れた体にはこたえる登りである。ゆっくりと高度を稼ぎ、二〇層で東北稜に出た。東北稜の頭の下である。これを右に巻いて二〇層登ると五峯

頂上のすぐ右の稜線に飛び出した。

待望の頂上に立ったのは一二時半である。ここには登山者が二人休んでいた。三日間人に会わなかったため気分安く声をかけて話をする。

下降路は前明神沢にとり、頂上で一緒になった二人とともに下る。岳沢でツェルトを張って思いきり体を伸ばす。

(タイム)五月一日||明神(七・三〇)宮川の
コル(八・四〇)九・二〇)カールポ
ン(一三・三〇)

五月二日||BP発(七・四〇)第一テラス
(二四・〇〇)カールポテン(二四・四〇)

五月三日||BP発(七・三〇)頂上(二二
・三〇)一三・一〇)岳沢(二五・〇〇)

(記・望月 忠)

《東壁中央フェイス(岩稜会ルート)》

〇一九七一年十月九日

◇パーティ||川島繁男、木村智

岩稜会ルートは別名赤壁とも呼ばれ、岩壁の中央部をほぼ直上しているルートである。最近では洞穴付近の崩壊などもあって訪れる人はあまりいないが、冬季は第二登の報を聞かない。

宮川のコルから下部岩壁に向かって広大なガラ場を詰める。頭上には荒々しい中央フェイスが覆い被さるようにならびえている。中央ルンゼ奇りのカンテ状を二Pで青草テラスから続くガレ場に出る。青草テラスからはコンティニェアスで

一P登ってバンド状テラスに出る。ここからはスタカットであるが、岩が脆くて

ビレイピンがなかなか打てず、岩の状態からして少し不安になる。ルートは逆層のフェイス登攀である。脆い岩に神経を使いながら三〇層ほど登ると捨縄のかかったテラスに着く。

二P目は頭上からハング帯で直上できず、左ヘトラバースしてからハング帯の切れ目を目指して直上する。最後はアプミで抜け出るとトールテラスと呼ばれる四角いテラスに着く。ここからは右上気味にハーケンに導びかれて登り、ガリーに

重いリュックを気軽に置いて……
新穂高温泉で岳人の気楽に泊れる宿
7月1日新装オープン 山の宿

北アルプス展望の大露天風呂

岐阜県吉城郡上宝村新穂高温泉口 TEL 05789-2733・2069
新穂高温泉バス停前(穂高岳山荘無線連絡事務所)

信頼のブランド

SOMMET
MOUNTAIN WEAR'S

本物を見る目を養う

近頃 数々の登山ウェアがでていますが、
 はたして本当に価値のあるものは
 いくつあるか あなたにはおわかりですか？
 縫製、生地、カラー、系、どれも
 とっても手をぬくことの許されない登山ウェア。
 あなたの素晴らしいMOUNTAIN LIFEを
 約束する **SOMMET** の製品を
 まよわずに指名下さい。

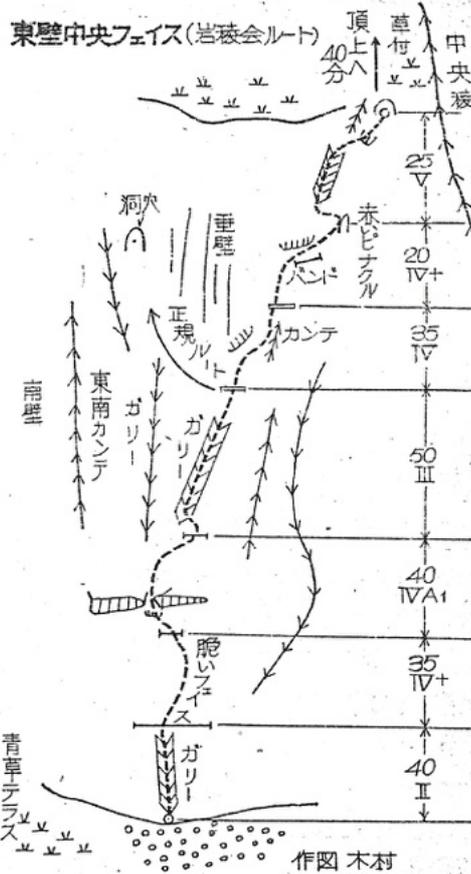
It's Your Good Brand!

株式会社

サミット

TEL. 0722(61)1536

〒592 大阪府堺市 浜寺区津町東5丁403



作図 木村

入る。ザイルにして四〇分一杯である。
 三、四Pはガリを直上して中央バン
 ドに出る。正規の岩稜会ルートはここか
 ら左上へ草付フェイスを登って再びガリ

一に入り、その後、大洞穴を左から越えているが、今日はここから右上にルートをとる。
 五P、赤茶けた逆層のカンテをフリクションで登り、垂壁に阻まれたところでピッチを切る。六P、四、五Pの垂壁はアブミを使って越え、外傾して浮き石のたまっているバンドを右ヘトラバースする。右端に赤いピナクルがあつてビレイポイントになる。
 七P、左の浅い凹角に入り、足を大きく開いて突っ張りながら登ると次第に傾斜が強くなってくる。残置ハーケンは入り口だけで途中にはなく、最後のハング味の所に抜け

うなのが一本あつた。
 ハングから上は草付で、これを登ると一枚岩に着いて登攀終了になる。セカンドはハングの所でハーケンが抜けてちょっとスリップしたが、大事にはいならなかった。
 登攀具をまとめて急な草付とフッシュ混じりの壁を五峯頂上目がけてしゃむに登ると四〇分ほどで頂上着。ここから主稜を前穂まで縦走し、重太郎新道を下つて深夜の上高地に着く。
 (タイム) 下部壁取付(九・三〇) 青草テラス(二〇・四〇) 一・〇〇 終了点(一五・二〇) 一五・四〇 五峯頂上(二六・一五) 前穂頂上(三〇・三〇) 上高地(三三・〇〇)
 (記・川島繁男)



五峰のルート開拓・II 東南カンテ初登攀

登攀倶楽部・岐阜

〔はじめに〕

東南カンテというのは南壁と中央フェイスとの間にあるカンテのことであり、長い間未踏を誇っていたルートである。倶楽部でも明神岳に早くから取り組んでいた先輩の沼田、望月らによって登攀の企てがなされたがアタックに至らず、今回のわれわれの登攀で初めてその全容が明らかにされた。

〔第一回試登〕

◇一九七二年七月二十九日～三十一日

◇パーティ 岡昭嘉、川島繁男、木村智
青草テラス下の下部壁は従来、中央ルンゼ側を巻いて登っていたが、われわれは左端の白いルンゼ状スラブに着目してこれを直登し、上部は岩稜会ルートの左手約三〇分の位置にある大ハング帯を直上して東南カンテに合することにした。

◇二本で右上に抜け、磨かれたスラブをフリクションで登って小さなレッジに達した。

七月二十九日(晴)
宮川のコルからガラ場を詰め、下部岩壁の中で最も岩の固そうな白いスラブ下から取りつく。

三P、スラブを五層登るとハングしたクラックに阻まれたが、幅広ハーケンを一本打ちこんで強引にレイバックで突破した。次に逆層のスラブが現れ、これをフリクションで登る。

一P、脆いフェイスを落石に気をとられながら直上し、小さなハングに阻まれたところでポルトを打ってビレイする。

この日はこれで時間切れとなり、青草テラスに荷物をデポして下宮川を下る。

二P、上が被った外傾バンドをハーケ

(タイム) 下部岩壁取付(二・三・三〇) 青草

テラス(二六・〇〇) BP(二七・〇〇)
三十日(曇後雨)

この日はBCよりそのまま下宮川を詰めて青草テラスに至り、昨日のデポ品を回収して上部壁の登攀に取りかかったが、二P目でルートを誤り、結局一P荷上げしたところで降雨となったためベイスに戻った。

三十一日(晴)

今日こそはハング帯を突破するつもりで青草テラスよりバンドテラスに上がって登攀の準備をする。上部の偵察の結果、ハング帯に向かってダイレクトに直上することに決める。

まず逆層のスラブに取りついてこれを

ハーケン二本で越え、さらに食い違ったような断壁に不安定なハーケンを打ってアブミを吊り、左上にフィンガーホールを使ってトラバース気味に登ると、細いバンドに出た。そして、このバンドを左端までトラバースし、今度はやや傾斜の強くなった外傾フェイスを上し、ザイルいっばいとなった所で外傾した小さなレッジに達してボルトビレイをとる。

上部壁三目、ここからは完全な人工となり、垂壁のボルト連打から外傾フェイスに入ると、左へハーケン頼りにトラバースを行う。ハング帯は全部で四段で構成されており、第一と第二のハングをいずれもボルト三本で突破する。

いよいよ最後の二段ハングが現れた。まず、下のハングの根元にハーケンを打ちこみ、それにアブミを吊ってさらに出口にもハーケンを打ち加え、掛けたアブミにぐいと体重を乗せた途端、「ガサー」という音とともに岩がはがれてハーケンが抜けてしまった。幸いにも墜落は免れたものの、岩が頭の上に落ちてきて口を切ってしまった。この事故と、時間がすでに四時間を回っているため、下の二人に下降を伝えてレッジまでアブミを掛け替えて戻り、レッジからはアブザイレンとクライムダウンで青草テラスへ戻った。テラスで登攀用具を整理しながら改めて東面カンテを見つみると、われわれの到達点はまだ全体の三分の一ほどで、少々がっかりしてベースに帰る。

〔タイム〕BC(七・二〇) 青草テラス(八・三〇) 九・〇〇 最高到達点(一六・〇〇) 青草テラス(一七・二〇)

〔第二回試登〕

◇一九七五年九月十四日(十五日)

◇パーティール宮本武敏、木村智

最初の試登から三年あまりの月日が過ぎて再び五峰へやってきた。青草テラスは相変わらず静かで、三年前にデボしておいたハーケン、ボルト類もそのまま残っていた。風雨のために錆だらけだろうと考えていたが、思いの外腐蝕してなくて助かった。

今回は強力なバートナーにも恵まれて、絶対に完登する意気込みでハンモックまで持参したが、やはり東南カンテは手強かった。

九月十四日(晴)

青草テラスから先回の試登ルートを通り、バンドテラスからスタカットに移る。最初のフリーのピッチは取付のハーケンが緩んでいたので打ち直し、四〇分でボルトの打つてある外傾テラスに達する。ここからはハング帯の人工となつて、二段のハングを越えて試登最高点に達した。ハングの根元に慎重にハーケンを打ち直し、さらにボルト二本とハーケンを打ち加えてハング帯を抜けた。ハング上は依然として被り気味の垂壁となつていて、相変わらずボルト連打で高度を上げる。

五本ほど埋め込んだところでアブミビレイを行いセカンドを迎える。

通算四目、ツルベ式にトップを交代し、左へ微妙なバランスで外傾フェイスのトラバースを行い、行き詰まったところより今度は右上気味にボルトとハーケンで抜けて凹状フェイス、さらにガリーに入ってビレイをとる。

五P、ガリーから左上に脆いフェイスを登ってカンテ末端のバンドテラスまで二〇分。

この日はハング帯のボルト打ちに時間を食い、ここでビバークを決めてさっそくハンモックを吊った。

〔タイム〕青草テラス(一〇・〇〇) 一〇・三〇) BP(一八・〇〇)

十五日(曇後雨)

通算六目、頭上の大ハング帯の直上は難しそうで、左手の南壁側のフェイスを回りこむことにする。非常に脆いフェイスを左上気味に登り、詰まったところから右上の浅い凹角に入って小さな外傾レッジに達してピッチを切る。

七P、トップを代わり、カンテ左手の雑然とした感じのフェイスをハーケンを打ち込みながら直上する。一〇分でハングに頭を押えられて右手にトラバースを試みる。ここは下がすっぱりと切れていて空中トラバースだ。ボルトとハーケンをを使って微妙なバランスで突破し、ようやく細いバンドに達した。このあたりは東南カンテの核心部と思われ、傾斜が強

くて思い切った動作が要求されるピッチであった。

八P、段状フェイスを一五分ほどフリーで登ると、再びハングに阻まれた。被り気味の壁にハーケンとボルトを連打、右へトラバース気味にアブミを操って突破すると、小さなビナタルに出た。ここで一息入れてルートを眺めると、あと一五分ほどでカンテの頭に達せられそうだった。しかし、依然として壁の傾斜は急で、ジャンピングを懸命になつて振るう。三本ほど連打するとフリーで登れそうの下に声を掛ける。しかし下からの返事は「もう時間がない」とのこと、残念だが下降と決める。テラスまではアブミで下つて懸垂の準備をする。

東南カンテの下降は、空中懸垂の連続で四〇分二回で昨日のビバーク地点に戻った。そして、ここからは大ハング帯の下降を避けて南壁へ四〇分一杯のトラバースを行い、さらに南壁を三回の懸垂で青草テラスに降り立った。

青草テラスで登攀具のデボを行い、雨の中暗くなった下宮川のガラ場を、養魚場まで下る。

〔タイム〕BP(八・三〇) 最高到達点(一六・二〇) 青草テラス(一八・二〇) 養魚場(二九・三〇)

〔完 登〕

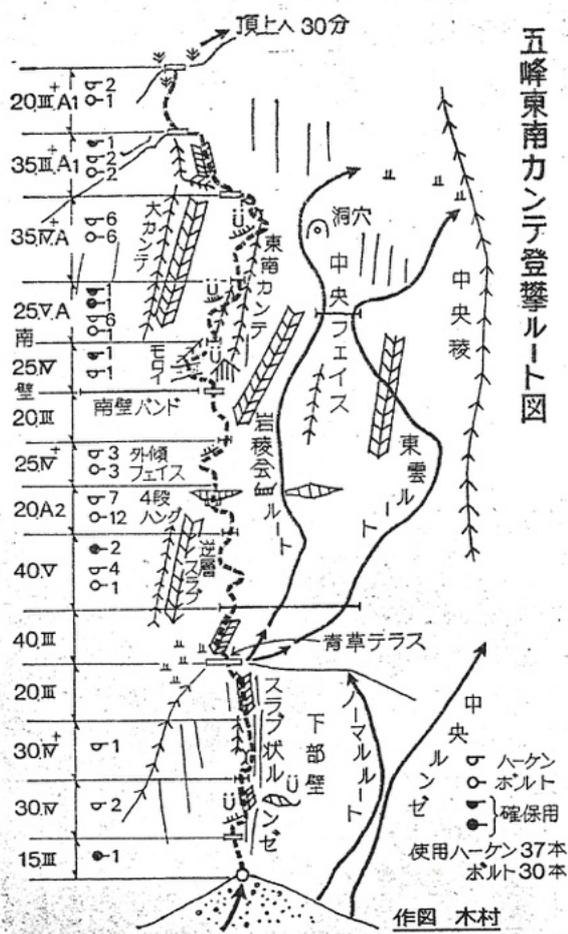
◇一九七五年十一月三日(曇)

◇パーティII宮本武敏、宇都宮行志、木村智

今年最後のチャンスとなった今回の登攀でぜひとも完登するつもりで、再び下宮川を詰めて青草テラスへ上がる。

今日は三人パーティであるのと、ルートがすでにかなり上部まで伸びているのでハング帯は省略し、南壁を登ってカンテの始まるバンドテラスに達することに。青草テラスより南壁の逆層スラブと草付帯をノーザイルで六、七〇登ると垂直帯が現れ、ここでザイルを結ぶ。ここからやはり逆層の壁を三〇登ると南壁バンドに出る。さらに東南カンテに向かってザイル一杯のトラバースを行うと、正規ルートに合流する。

五峰東南カンテ登攀ルート図



作図 木村

ここは南壁の頭らしく、事実上の登攀は終わろうとした感じであったが、稜線に出るには一〇分ほどの小フェイスを登る必要があった。

通算一〇P目、宇都宮がトップとなってボルト二本とハゲルン一本でここを克服し、出口は強引にブッシュを掴んで稜線に飛び出した。そこは完全なテラスとなっており、長々と体を伸ばすことができる絶好のビバークサイトでもあった。

整地を終わってツェルトを張り、シュラフに入ると、ようやく足かけ四年にわたった登攀が

ここから試登最高点まではすでにハーケン、ボルトが打ち込まれているので比較的楽であった。

宮本がトップとなり、最後のボルトより未知の部分の登攀を開始した。しかし、ザイルはなかなか伸びず、さんざんためらった挙句によくや岩の突起にシュリゲを巻き付けてアプミを吊り、それを頼りにカンテの向こう側に消えた。

しばらくしてビレイピンを打つ音がして合図がある。セカンドで最後の乗越し点に達すると、ここは少々被っており、その上シュリゲの位置がやや出口より低い位置にあるので思い切りを要求される場所であった。ここを抜けると傾斜が落ちて新雪が薄く積もった大きなバンド

テラスに出た。確保している宮本と思わず顔を見合わせて「終わりのようだね」と声をかける。ラストの宇都宮を迎え、今後のルートを検討する。左手は南壁上部のカンテ、右手は雪をつけた凹角が走っていた。

通算九P目、ルートとして凹角を選び、岩壁に付着した雪を払い落としながらの登攀を開始する。途中、雪がなければフリクションで登れるかもしれないと思っただが、のつべりしたスラブに阻まれ、思いがけなくボルト打ちを強いられた。凹角の出口はチムニー状であり、右手から回り込むようにして抜けると大きなテラスに出た。ガッチリとビレイを取り、下の二人に合図を送る。

〔登攀後記〕

完成した喜びがわいてくると同時に、三年前に初めてこのルートに挑んだ時のごとく鮮やかに脳裏に甦り、なかなか寝つかれなかった。

〔タイム〕青草テラス(二〇・三〇) 南壁の頭(二七・〇〇) 稜線(二八・〇〇)

東南カンテは明神岳を知る人にとって最高の目標であった。私が登ろうと思いついたのは中央フェイス登攀の折に、その圧倒的なプロフィールを目の前にしてからである。最初の試登の時は下部のハング帯で追い返されたので、核心部の状態はわからなかったが、二回目の時にはその中に足を踏み入れてみて、意外に岩が固く、完登できる確信を得た。明神岳のそれまでの登攀史は脆さとの戦いでもあったので、半分近くが人工となったこのルートに脆い岩層がもしあったら完登は不可能と思われる。

一回の登攀でグレードをつけるのはよくないかもしれないが、ルート長の、困難さからいって、明神岳全域を通してみて、もっとも高度な内容を持ったルートと思う。

また冬季は極めて困難な登攀となることは必至で、下部壁からの登攀は二回ぐらいのビバークを強いられるかもしれない。

(記・木村智)